

令和6年度 学校経営計画に対する自己評価計画中間評価報告書

石川県立穴水高等学校

重点目標	具体的取組	主担当	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	判定	備考
1 生徒自身が自己の目標を見据え、課題に対して主体的・継続的に取り組む姿勢を養う。	①進路選択に係る講話や体験活動等とおして、キャリア意識の向上を促す。	[進路指導課] [各教科]	【成果指標】 生徒各自が目標を達成できた。	模試における英数国合計の偏差値が 55 以上の生徒が受験者の A 50%以上 B 40%以上 C 30%以上 D 30%未満	アドバンス [7月模試] D 1年 (8.3%) 2年 C (33.3%)	成 果：進路行事を個々の生徒の進路希望に応じて適時適切なタイミングで実施することができた。 課 題：生徒が自らの進路について考え、実現に向けて主体的に努力しようとする意識や向上心が不足している。 改善策：クラス担任による進路面談や進路希望調査をもとに、進路指導課から進路選択に係る調査を試みることで生徒の主体的な進路選択を促す。
			ベーシッククラス 漢字検定	漢字検定準二級保持者の割合が A 50%以上 B 40%以上 C 30%以上 D 30%未満	ベーシック D (12%)	成 果：2年生で1名自主的に受験して、準2級に合格したのは、成果と言える。この生徒は、さらに上の2級にも合格する可能性が高い。 課 題：3年生の全員受験が6月に行われたが、既に準2級を取得している4名は、2級に挑戦したが、届かなかった。その他の準2級受験者は、全員合格点に達しなかった。 改善策：1、2年生の全員受験は、1月に計画しているので、個別テキストの購入や弱点強化で合格率を上げたい。
			キャリアコース 商業検定	商業各種検定合格率が A 75%以上 B 65%以上 C 55%以上 D 55%未満	キャリア	成 果：今年度の検定実施が11月からのため、現在受験した生徒がいない。 課 題：11月から1月にかけて検定シーズンとなる。 改善策：個に応じた目標設定と授業、家庭学習のつながりを意識させた個人指導の実施を計画する。

重点目標	具体的取組	主担当	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	判定	備考	
1	生徒自身が自己の目標を見据え、課題に対して主体的・継続的に取り組む姿勢を養う。	②習熟度(類型)別の授業・補習や学習課題等とおして、自ら学ぶ意欲を高める。	[教務課] [各学年] [各教科]	【成果指標】 各クラスの1日の学習平均時間(各定期考査までの期間)が アドバンスクラス 2時間以上 ベーシッククラス 1時間30分以上 キャリアコース 1時間30分以上	各クラス(コース)において基準を達成した生徒の割合が A 70%以上 B 60%以上 C 50%以上 D 50%未満	アドバンス D (9%) ベーシック D (12%) キャリア D (14%)	成 果 : 4月から7月までの平均家庭学習時間は、アドバンスクラスは1.3時間、ベーシッククラスは0.8時間、キャリアクラスは0.7時間だった。学年別では1年生が0.8時間、2年生は0.9時間、3年生は1.2時間であった。 課 題 : 考査前の課題や週末の宿題だけでなく定期的な予習復習による平日の時間増が必要。 改善策 : 成果指標を達成するためには従来の学習方法だけでなく、自宅でのスマホ等のICT機器による動画視聴等の学習方法も模索していく必要がある。
		③教育ICT環境を活用し、個別最適な学びと協働的な学びの一体的充実をおして、確かな学力を養成する。	[ICT関連GIGAスタ ッフ] [各教科]	【努力指標】 ICT研修や互見授業を通じて「GIGAスクール構想」に適った、一人一台端末を用いた授業づくりに取り組んだ。	一人一台端末を用いた互見授業に参加し、「GIGAスクール構想」に適った授業づくりに取り組んだ教員の割合が A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	A (100%) A47.6% B52.4%	成 果 : 昨年度末より導入した映像機器により、授業でICTを用いるメリットが増加し、授業に幅広く導入できるようになっている。 課 題 : A+Bは100%だが、Aの割合は昨年度の同時期に比べ4%程度の増加にとどまった。多くの授業への普及が課題となる。 改善策 : 一人一台端末を活用した授業づくりについて、若プロや研究授業との連携を図り、各教科全体における浸透を図る。
2	規範意識と協調性を高め、自他を思いやる心を醸成する。	①学校内外の日常生活の場面で、TPOを前提とした判断と言動ができるよう支援する。	[生徒指導課]	【満足度指標】 規範意識を持って、自発的に行動することができたと考えている。	自分から主体的にTPOに応じた挨拶ができているか。 A とても出来ている B 出来ている C あまり出来ていない D 出来ていない	93.2% (A+B) A23.9% B69.3%	成 果 : 昨年から継続している朝の登校指導(挨拶運動)の成果が出ていると感じている。 課 題 : 昨年度と同様に、校内では挨拶は定着しているが、校外での挨拶がまだ弱い。 改善策 : 今年度も各種ボランティアに、積極的に参加してきた。今後も継続し、地域の方々との交流を深め、挨拶の重要性を理解させていく。

石川県立穴水高等学校

重点目標	具体的取組	主担当	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	判定	備考
2 規範意識と協調性を高め、自他を思いやる心を醸成する。	②学校行事や課外活動をとおして、多様性を尊重しながら協働できる姿勢を養成する。	[生徒会]	【満足度指標】 学校行事や様々な校外活動により、良好な人間関係を築き、何事にも主体的かつ積極的に取り組むことができる。	様々な活動をとおして、他者と良好な関係を築き協働することができるか。 A とても出来ている B 出来ている C あまり出来ていない D 出来ていない	年度末に評価	成果：震災の影響もあり、通常通りとはいかない中で、生徒・職員が協力しながら、様々な行事を企画・運営できた。 課題：学校行事の企画・運営を生徒が主体的に行うことが必要である。 改善策：生徒会執行部を中心として、生徒同士で企画できるような体制をとる。
3 地域との交流・連携を密にし、地域を理解し貢献しようとする姿勢を養う。	①地域資源(自然・人材・団体・企業)や他校種と連携し、地域理解を深め、探究する力を養成する。	[総探コーディネーター] [各学年]	【満足度指標】 生徒が地域のために課題意識を持って、積極的に関わり、地域への理解を深めている。	地域の課題解決に向けて、積極的に地域と関わり、地域への理解を深めることができるか。 A とても出来ている B 出来ている C あまり出来ていない D 出来ていない	73.8% (A+B) A13.6% B60.2%	成果：3学年の最終発表会や地域再生に向けた意見交換会等から地域への理解を深めることができた。 課題：フィールドワーク等の現地調査により、探究をさらに深める必要がある。また、生徒に課題意識を持たせ、その解決方法についてより深く考えさせる必要がある。 改善策：地域と連携し、フィールドワークの機会を設ける。それぞれの課題に応じた訪問先に行けるように早めの計画を立てる。
	②地域ボランティア等へ積極的に参加し、地域貢献意識を高め、課題解決力を養成する。	[生徒指導課] [生徒会]	【満足度指標】 地域のボランティアやイベント等に参加した生徒が自己有用感を持ち、地域に貢献することができたと考えている。	地域のボランティアやイベントに参加し、地域に貢献できているか。 A よくできている B できている C あまりできていない D できていない	年度末に評価	成果：復興に向けた様々なボランティアに参加する機会があり、例年より多数の生徒が参加することができた。 課題：より多くの生徒が地域のイベントに自発的に参加するような働きかけが必要である。 改善策：地域のイベント等に参加することの意義や目的を理解させることや参加後の言葉かけを大切にし、自己有用感を持たせる

重点目標	具体的取組	主担当	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	判定	備考	
3	地域との交流・連携を密にし、地域を理解し貢献しようとする姿勢を養う。	③ホームページ等で、教育活動や生徒の様子を積極的に情報発信する。	[総務課]	【満足度指標】 ホームページや学校だより等をおして、適切に学校情報や教育活動の様子がタイムリーに発信されている。	学校情報や教育活動の様子を知ることができる情報発信が、適切になされていると感じている保護者の割合が A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	A (98.8%) A65.5% B33.3%	成果：AとBの合計で98.8%という高い数値となった。 課題：コラボルへの保護者登録が100%ではない。 改善策：PTA役員・理事と連携して広く広報に努め、今後も生徒の声を大事にしながら体験談等を情報発信していくことに努める。
4	学校の教育力向上のため、組織力を高め、教師力の充実を図る。	①授業改善と資質向上に意欲的に取り組むとともに、組織的思考力や組織的行動力を高める。	[教務課]	【努力指標】 年3回の互見授業ウィークを設定し、それぞれ2回以上参観することとし、本校の授業の質向上を図る。	互見授業ウィーク中2回以上参加した職員の延べ割合が A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	B (82%)	成果：多くの教員が異なる年齢層の授業を参観しており、参考となる点や授業者の改善点をあげるにより互いの授業改善に活かせる部分を見出せたと考える。 課題：主要5教科だけではなく、生徒の活動が多い実技を伴う教科・科目の授業にも参観すると良いと考える。 改善策：互見授業について周知して、年間6回以上参観できるよう声掛けと準備を進める。
			[若手教員早期育成プログラムコーディネーター]	【成果指標】 年間研修計画に即して、研修を実践する。各期の若手が確実に力をつけるとともに若手教員が講師を行う場面を設定する。	校内研修の実施回数（互見授業研究授業・講師役も含む）が A 25回以上 B 20回以上 C 15回以上 D 15回未満	年間計画の実施状況で判定（下半期後に判定）	成果：年間指導計画の先取りを考慮して、他の分掌の会議や委員会にも積極的に参加させてもらった。夏期休業中のビデオ視聴もその成果を能登半島地震の振り返り研修会で活かすことができた。 課題：昨年度は、1月に震災が発生し、3学期に研修を行うことができなかった。 改善策：中間成果にも上げた、先取りを意識し、2学期に実施回数を増やす工夫をしていく。

重点目標	具体的取組	主担当	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	判定	備考
4 学校の教育力向上のため、組織力を高め、教師力の充実を図る。	②業務改善の意識を持ち、効率的・効果的に業務を実践する。	[教頭]	【成果指標】 各種業務の精選や重点化等を意識し、組織として効率よく効果的に業務に取り組んでいる。	職員ストレスチェック集団分析において、「仕事の量的負担・仕事のコントロール」項目と、「職場支援」項目におけるストレスリスクが県内平均に対して A 両項目とも下回る B 片方が下回る C 両方とも高い D 全国平均をこえ、高リスクである	判定はストレスチェック集団分析の判定後	成 果：県内教職員の時間外勤務の平均よりも本校の数値は下回りつつも、学習面や部活動、学校内外の諸行事、震災復興に向けた取組については組織的に当たることができている。 課 題：春から夏にかけて運動部顧問の時間外勤務が増加すること。また、時間外勤務の多い職員と少ない職員とでは大きな差がある。 改善策：学年や課としての業務、校内外の諸行事については、組織として分担協力して実施できるように計画を立て運営する。
	③危機管理意識を高め、緊急時にも適切に対処できる学校組織を構築する。	[教頭]	【努力指標】 想定される危機や生徒問題に備えた対応や対策ができるよう、効果的な校内研修会が行われている。	研修会により、具体的な危機や生徒問題への対応の仕方が把握できたと考える教員の割合が A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	A (100%) A76.2% B23.8%	成 果：令和6年能登半島地震で大きな被害を受け、余震や再発時にはどのように対処するか、どのような備えや訓練が必要か等について協議することができた。また、生徒の心のケアについても、県教育委員会のオンデマンド研修や校内の「心と身体の健康調査」により、生徒のストレスや震災へのトラウマ度についてや、どのように対応するかについて理解を深めることができた。 課 題：危機対応は教職員一人ひとりの当事者意識と、突発的な危機に対応できるための研修と実技の反復が必要である。 改善策：学校管理計画の危機管理マニュアルを熟知するとともに、マニュアルの不備な点の見直し作業や、組織として学校の諸課題について協議する場を設定する。